氏　名（本籍）	岡部善平（おかべよしへい）（愛知県）
学位の種類	博　士（教育学）
学位記番号	博乙第 1846 号
学位授与年月日	平成 14 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	「総合学科」高校生の選択制カリキュラムへの適応過程に関する研究

主　査	筑波大学教授	博士（教育学）	田中統治
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	大髙　泉
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	宮寺晃夫
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	渡邊光雄
副　査	筑波大学教授		柳本雄次

論文の内容の要旨

1．研究目的

この研究は，大幅な科目選択制を導入した高等学校「総合学科」のカリキュラムに対する生徒の適応行為を明らかにするため，とくに生徒によるカリキュラムへの意味付与に着目し，その諸過程を理論的ならびに実証的に解明することを目的としている。中等教育カリキュラムの研究領域において，選択制をどのように採り入れるべきかという問題は中心的な研究課題の一つである。とくに近年の高校教育改革において科目選択制が拡大する中で，選択制カリキュラムとこれへの生徒の適応行為の関係は，カリキュラム研究者の主要な関心となっている。しかし，従来の選択制に関する諸研究は，カリキュラムの編成過程や選択制の存立形態に関する研究などがその大半を占め，生徒の適応行為を分析対象としていない。しかも，先行研究の多くは，生徒が特定の科目あるいはコースを選択する以前からそれらに何らかの関心を保持し，適切かつ豊富な選択肢が提示されれば自発的に選択を行いうることを前提としてきた。このため，カリキュラムが生徒の選択行為を規定し，特定の関心を作り上げていく側面，つまり組織的社会化の過程を十分に解明してこなかった。本研究では，「総合学科」高校生の間でみられる科目選択の過程をフィールドワークによって時系列的に観察し，その結果をもとに，彼らが選択制カリキュラムに付与する意味の内容と，これに影響を及ぼす諸要因を明らかにする。

2．研究方法

本研究は，生徒の選択行為に隠れた意味を彼らの日常的な行為から感受するため，エスノグラフィーの手法を用いている。具体的には，単一の「総合学科」高校を対象に長期にわたる参与観察と生徒への聴き取りおよび質問紙調査を実施した。その理由は，生徒による科目選択過程を時系列的に分析すること，および資料収集の過程による仮説生成をめざすからである。このため，論文は，実証的検討から得た知見を，行為論の諸概念によってさらに一層深く考察するという構成をとっている。また，時系列的な分析を試みるため，生徒集団が科目選択の過程で構成しているパースペクティブ（perspectives）に着目し，これを，「ある特定の選択の岐路に立った集団が選択行為を決定する際に構成する，その集団に特有のものの見方ないしは考え方」と規定する。

3．論文構成

第Ⅰ部　高校教育カリキュラムにおける生徒の選択と適応の問題

まず本研究が設定する問題の所在を明らかにし，後期中等教育の選択制カリキュラムに関する独自の理論構築をめざすことを述べている。次に英米で行われた科目選択に関する先行研究を整理し，その中で本研究の占める位置と意義を明らかにした。その結果，従来の研究が生徒の科目選択を過程として捉える視点に乏しく，このため科目選択行為をカリキュラムの形態との関連で分析していなかったことを指摘した。第３章では，本研究の方法および分析枠組を設定し，エスノグラフィーの方法およびパースペクティブによる概念枠を提示した。第４章では，調査対象校である筑波大学附属坂戸高校の概要とそのカリキュラムの特徴を検討し，調査の方法を述べられている。

第Ⅱ部　実証的検討

３年間にわたる参与観察，聴き取り，および質問紙調査の結果を分析している。とくに，生徒たちが科目の選択と変更を行う時期に実施した質問紙調査の結果を時系列的に分析した。第１章では，１年次生に焦点を当て，彼らがどのような過程を経て科目を選択していくかについて分析し，その結果，彼らが科目選択の目安として「類」および「系列」に準拠していることを明らかにした。第２章では，２および３年次生を対象に，前者の科目変更過程そして後者の進路選択過程をそれぞれ分析した。まず２年次生の場合，各系列への同調と非同調との間で彼らのパースペクティブが進路展望によって分化していることを明らかにし，次いで３年生の場合を分析した結果，彼らが「系列に基づく進路展望」を構成し，結局，「類」に準拠した進路を志向することを明らかにした。第３章では，上記の調査結果を要約し，第Ⅲ部での検討問題を提示した。

第Ⅲ部　理論的考察

ここでは，選択の岐路にみられる生徒集団の適応行為が結果的に系列に準拠するものへと収斂していく一連の過程について，これまでの分析結果をもとに理論的な検討を加え，「総合学科」における選択制カリキュラムを再構成していく上での視点を明確にした。第１章では，生徒集団に共通するパースペクティブとして，「類型化」と「時間的展望」の二つを指摘し，これが選択制カリキュラムへの彼らの適応行為を規定していること，また，この点でわが国の選択制カリキュラムの特質が「進路展望を賦課するカリキュラム」として特徴づけられること，をそれぞれ明らかにした。第２章では，「総合学科」の選択制カリキュラムを再構成するための理論的な視点として「選択制カリキュラムへの行為論的アプローチ」を提案した。この接近法は，「類」あるいは系列などの特定の進路との対応関係を前提とした知識枠が生徒集団に対してもつ「意味」を捉え直すための視点であり，これにより，選択制カリキュラムへの生徒の適応過程は，彼らが既存の知識枠から統制を受けながら，自らにとって意味ある科目を類型化していく過程として再規定されるという。

第Ⅳ部　結　論

ここまでの研究成果を要約し，本研究がカリキュラム研究にもたらす意義を明らかにした。本研究の成果を約言すれば，それは，従来の研究が注目してこなかった選択制カリキュラムの形態と生徒集団の適応過程との関連性を，生徒たちがカリキュラム上の知識枠に規定されて構成するパースペクティブの側面から解明したことである。すなわち，本研究では，生徒集団による選択制カリキュラムへの適応過程を，知識枠への準拠および長期的な進路展望を志向した「機能次元での適応」と，より即時的な関心の充足の視点から知識枠を再解釈する「意味次元での適応」とを含む，「複合的な」カリキュラム経験として捉え，これを解明するための理論モデルを提案した。そして，これらの成果が，「選択制カリキュラムへの行為論的アプローチ」に基づいて生徒集団のカリキュラムへの適応過程を全体的に解明する上で有効であることを確認し，今後，カリキュラムの時系列的ならびに質的な方法論として貢献できることを示した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の独自性は，「総合学科」高校生の間でみられる選択制カリキュラムへの適応過程を時系列的に分析し，カリキュラムの経験内容に接近するための「行為論的アプローチ」による理論モデルを提案したところにある。この研究成果は，日本において蓄積の少ない選択制カリキュラムの研究に対して，社会学的方法による研究視角を新たに提案している。また，中等教育カリキュラムの研究についても，「生徒の学習経験」の観点から独自に理論枠組を構築し，この結果をもとに選択制カリキュラムの運用と指導法に関する基礎的な視点を示唆している。その論証の過程は実証および理論の両面において一貫しており，また，「行為論的アプローチ」による諸方法を再構成し，複合的な選択制カリキュラムへの学習者の適応過程を一個の研究対象として概念化した点が高く評価される。この学術的な評価は，日本教育社会学会および日本カリキュラム学会の機関誌への論文掲載によってそれぞれ示されている。本研究の結果がマクロな次元での教育改革論を含むカリキュラム研究全体に対してなしうる示唆は未だ明確にされていないけれども，しかし，学習者のパースペクティブがカリキュラムによって規定される一連の諸過程を解明しており，この成果は今後の中等教育カリキュラムおよび選択制カリキュラムに関する実践的研究に対しても有意義な示唆を与えていると認められる。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。